

新世紀の都市化へ
— パリ第9区の出現 —

久 末 弥 生

『都市経営研究』第1巻 創刊号 2021年3月
大阪市立大学 都市経営研究科
都市経営研究会

大阪市立大『都市経営研究』第1巻 創刊号（通巻1号） 2021年3月

■ 論文 ■

1頁～19頁

新世紀の都市化へ — パリ第9区の出現 —

久末弥生（大阪市立大学大学院・都市経営研究科・教授）

Urbanization toward a New Century:

The Appearance of the 9th Arrondissement of Paris

Yayoi HISASUE (Professor, Graduate School of Urban Management, Osaka City University)

【目次】

- I. はじめに
- II. パリ第9区の形成の歴史
 1. 農業コロニーの誕生、ノートルダム・ド・ロレット教会の建立（紀元前～17世紀）
 2. 城壁の取壊し、大通りの創設、ショセ＝ダンタン地区の誕生（18世紀）
 3. 芸術の都パリとヌーヴェル・アテーヌ、百貨店ブーム、ピガール地区の繁栄（19世紀）
- III. パリ第9区の4つの地区の歴史的背景と特色
 1. パリ第9区の現状と課題
 2. サン＝ジョルジュ地区－「芸術の都パリ」の核心、大規模不動産取引
 - (1) チボリ公園の誕生、ヌーヴェル・アテーヌの成功、高級住宅地分譲
 - (2) 第二帝政からベル・エポックまでの住人たちとロマン主義
 3. ショセ＝ダンタン地区－フランスの商業と金融の中心地、パリ第9区の中心点ノートルダム・ド・ロレット教会
 - (1) ポーシュロン村から大貴族の邸宅地区へ
 - (2) 19世紀後半のショセ＝ダンタンと首都のイメージ－パリ・オペラ座、高級ホテル、銀行本店、百貨店
 4. フォーブール・モンマルトル地区－美術市場の中心地、老舗の商店街
 - (1) グランジ・バテリエール村から大邸宅街へ
 - (2) 商業戦略上の休憩場所と老舗の商業・娯楽施設－パッサージュ、カフェ、画廊、劇場
 5. ロシュシュアル地区－パリ第9区で唯一の下町エリア
 - (1) 果樹園から労働者たちの下町エリアへ
 - (2) パリの庶民生活－町工場、労働者用団地、居酒屋、サーカス小屋
- IV. 都市化の到達点と都市の展望

【要旨】

現代社会における都市のイメージは、19世紀に始まる都市化の時代を牽引したフランスの首都パリ、とりわけ19世紀後半から急速な都市化を実現したパリ第9区に、その原点を見いだすことができる。19世紀のパリにおける猛烈な人口増加を背景に、金融、不動産取引、商業、娯楽といった近代都市に不可欠な領域と、

文化、芸術というフランスのアイデンティティを支える領域のいずれにおいても、世界の中心地として繁栄したパリ第9区は、都市化の1つの到達点を早期に示したエリアでもあった。

19世紀後半に本格化した都市化の時代すなわち人口の大都市集中の時代から約150年を経た今、2020年に生きる我々は新たな段階を迎える転換期に立っている。本稿では、都市化の時代を象徴するパリ第9区に着眼し、現代まで継承されてきた都市のイメージを概観すると共に、新たな都市の展望を探る。

【キーワード】

パリ第9区、都市化、人口の大都市集中、大通り、都市計画

【Abstract】

The modern image of the urban city results from the second half of the nineteenth century in Paris, which led an epoch of rapid urbanization, especially in the 9th arrondissement. Backed by the strong gravitation of people toward Paris during that time, the 9th arrondissement prospered as a world center in various fields, including finance, real estate, commerce, and amusement, which are indispensable fields in the modern city, as well as art and culture, which give France its identity.

In 2020, about 150 years after this peak of rapid urbanization in the 9th arrondissement, a turning point has been reached toward the next stage of the urban city, namely, the gravitation of people toward the large cities that have expanded since the second half of the nineteenth century. With a focus on the 9th arrondissement of Paris, which symbolizes an epoch of rapid urbanization, this article first surveys the image of the original urban city, then imagines that of the modern urban city that has succeeded over time, and finally proposes a new image for the urban city of the future.

【Keywords】

9th Arrondissement of Paris, Urbanization, Gravitation of People toward the Large Cities, Boulevard, City Planning

I. はじめに

2020年、COVID-19の世界的大流行により、人々の価値観は一変した。いわゆる「ニューノーマル2.0 (New Normal 2.0)¹⁾」が世界で提言される中、人々が都市に求めるものも大きく変わろうとしている。現代社会における都市のイメージは、19世紀から20世紀前半にかけて都市化の時代の幕開けを牽引したフランスの首都パリに、その原点を見いだすことができる。中でもパリ第9区は19世紀当時、新世紀に向けて急速な都市化を実現した行政区であり、都市化の時代を象徴するエリアとして興味深い。現在もなお、文化、芸術の中心地として「芸術の都パリ」を支え続けるパリ第9区は、サン＝ジョルジュ地区 (quartier Saint-Georges)、ショセ＝ダンタン地区 (quartier Chaussée d'Antin)、フォーブール・モンマルトル地区 (quartier Faubourg-Montmartre)、ロシュシュアール地区 (quartier Rochechouart) という4つの地区から構成され、218ヘクタールの土地面積とおよそ5万6000人の居住人口をもつ²⁾。19世紀から1世紀を超えて続いてきた都市化の時代から、人類として新たな段階への移行を求められているとも考えられる今、都市はどのように変容しうるだろうか。

本稿は、都市化の時代を象徴するパリ第9区に着眼し、ほぼ1世紀にわたって都市が目ざしてきたものを概観することで、都市の展望を探るものである。なお、本稿では数多くの「通り」に言及するが、フランス語の「大通り (Boulevard)」と「通り (Rue)」を明確に分けて和訳することで、類似の名称をもつ複数の「通り」を区別している。

II. パリ第9区の形成の歴史

1. 農業コロニーの誕生、ノートルダム・ド・ロレット教会の建立（紀元前～17世紀）

パリ市が20の行政区（arrondissement、大都市行政区画）に移行したのは、オスマン知事（Georges-Eugène Haussmann, 1809-1891）時代の1860年のことである。なお、「パリ市の地位と首都の整備に関する2017年2月28日法（La loi du 28 février 2017 sur le statut de Paris et l'aménagement métropolitain）」により、2020年には従来のパリ第1区からパリ第4区までの4つの区を統合するかたちでパリ中央（Paris Centre）区が誕生した。同法は行政の簡略化を旨とするもので、新たな権限配分が国とパリ市の間で行われ、各区の区長の役割が強化されたが³⁾、あくまでも行政上の統合であって、従来の4つの区が消滅したわけではない。

古くからの野菜畑だったパリ第9区のエリアは、1820年代から1850年代にかけて強力な都市化（urbanisation）の対象となり⁴⁾、1860年にパリ第9区役所が「徴税請負人⁵⁾ オニーの館（Hôtel d'Augny）⁶⁾」に置かれた後は、19世紀から20世紀前半のパリの文化、芸術、金融、不動産取引、商業、娯楽などの中心地になっていった。その背景には、猛烈な人口増加という圧力の下で19世紀に始まる、人口の大都市集中があった⁷⁾。地方からの転入によって増え続ける首都パリの人口は、1896年には既に250万人に達していた。つまり、19世紀のパリで発現した「都市化」は本質的に「人口の都市集中」と同義であり⁸⁾、都市の人口は増え続けるというこの時代の前提と共に、都市のイメージとして21世紀の現代まで継承されてきたのである。

太古の時代はセヌ川に覆い尽くされていたパリだが、川水はやがて現在の河岸あたりまで徐々に引いていき、ベルヴィル（Belleville. 現在のパリ第19区と第20区のエリア）、ビュット・ショーモン（Butte Chaumont. 現在のビュット・ショーモン公園）、マルトル山（“mont” Martre. モンマルトル）の丘などが現れた。セヌ川が引いた後に残された新生地は、植物で覆われた広大な沼地を形成した。9世紀のノルマン人の侵略の時にルイ2世（Louis II, 在位877-879）は、すぐ水に浸るその土地の所有権を、サン・トポルテューヌ（Sainte-Opportune. フランス北西部のノルマンディー地方の中心部）のカトリック司教座聖堂参事会員たちが得ることを認めた。1134年にルイ6世（Louis VI, 在位1108-1137）はモンマルトル大修道院を建立し、その領地がちょうど現在のパリ第9区の大半を占めていたのだが、この不毛の土地が乾き、野菜畑や牧草地になるには、さらに2世紀を要した。そこで作られた農産物はパリ市民や競合農家たちから非常に高く評価され、修道院という宗教的共同体は繁盛した。フィリップ2世（Philippe II, 在位1180-1223）の治世下、カトリック司教座聖堂参事会員たちは所有地の賃貸を認め、3つの農業コロニー（colonie. 集落）が生まれ、これらがパリ第9区の形成起源となった。すなわち、現在のパリ第9区のフォーブール・モンマルトル地区の近くに「グランジ・バテリエール（Grange Batelière）」、現在のパリ第8区との境界に「マチュラン（Mathurins. 聖三位一会体）」、現在のサン・トリニテ教会のあたりに「ポーシュロン（Porcherons）」という、3つの修道院附属農場村が生まれた。

16世紀になると、モンマルトルの丘の麓の沼地がようやく埋め立てられ、水路や溝が整備され、現在はリシェ通りとプロヴァンス通りのあるところがグランデグー（Grand Egout. 大下水道）となった。ルイ14世（Louis XIV, 在位1643-1715）が即位するまでパリ第9区のエリアは本質的に田舎で、先述の2つの通りとマルティール通り、ブランシュ通り、クリシー通り、将来はショセ＝ダンタン通りとなる田舎道といった数本の道しか通っていなかったが、サン＝ラザール通りだけは中世の乗り物が通る道路の1区間になっており、東西をつなぐ大きな幹線道路だった。1645年にはラマルティンヌ通りに初代のノートルダム・ド・ロレット教会が建立されたが、その頃には既に数多くのキャバレーもその区域に建てられていた⁹⁾。

2. 城壁の取壊し、大通りの創設、ショセ＝ダンタン地区の誕生（18世紀）

ルイ14世はパリ市の開放を宣言し、先代の王たちが築いた「黄色い堀（Fossés jaunes）」と呼ばれる城壁を撤去させた。彼は自身の足跡として大通りの創設を命じ、1680年から1705年までにカブシーヌ大通り、イ

タリアン大通り、モンマルトル大通り、ポワッソニエール大通りなどが整備され、それが現在の「グラン・ブールヴァール（Grands Boulevards. パリ第9区の南端を画する一連の大通りを意味する）」になった。これらの大通りは、パリ市の北部を重厚なパリ中心エリアに変え、魅力的な中心地として次第に繁栄していった。大通り沿いにはいくつもの貴族の邸宅がすぐにそびえ立ち、最初のカフェが開業し、会食趣味の新たな場所として上流社会に公認された¹⁰⁾。今や世界の都市に普及したカフェ文化も、18世紀初頭のパリの大通り沿いのカフェに、そのルーツをたどることができるのである。こうしたパリ第9区のエリアにおける大きな変化はすべて、不動産侵奪（emprise. 行政によって一時的または恒久的になされる、私人の不動産に対するあらゆる占有取得）の手法によるものだった¹¹⁾。

ルイ15世（Louis XV, 在位1715-1774）は1720年に、パリ市民の人口増加に直面して、城壁の外側に新たな地区（quartier）をつくることを認めた。これがショセ＝ダンタン地区の誕生であり、現在のパリ第9区役所である「徴税請負人オニーの館」を含めて、徴税請負人や銀行家たちは彼ら自身の社会的地位を高めるための特別に豪華な邸宅や、彼らがパトロンとして保護する女優や歌手たちのための庭園に囲まれた素晴らしい邸宅を、競ってそこにつくらせた。これらの邸宅は収益を生む大きな建物としてショセ＝ダンタン地区に残り、新たな長い通りが創設された。ショセ＝ダンタン地区は1789年のフランス革命後、フランス第一帝政（1804年～1814年）下で美しさを取り戻し、フランス王政復古（1814年～1830年）下で人気が頂点に達することになる。1800年に54万7000人だったパリ市の人口は1827年には89万人となり、銀行家たちは強力な民間会社として再編成され、これらの会社がパリ第9区のエリア全体について不動産管理網を形成していった¹²⁾。

3. 芸術の都パリとヌーヴェル・アテーヌ、百貨店ブーム、ピガール地区の繁栄（19世紀）

1830年代からはグラン・ブールヴァールがパリの中心となり、フランス第二帝政（1852年～1870年）の頃には社交界とドゥミモンド（demi-monde. 高級娼婦の業界）、芸術家と露天商、大富豪と浮浪者が隣り合っ、意気揚々と自分を見せびらかしながらぶらぶら歩く道路になった¹³⁾。大都市の大通りをそぞろ歩くという現代人の習慣もまた、そのルーツを当時のパリに見いだすことができるだろう。

1821年に最初のパリ・オペラ座がベルティエ通りに創設された¹⁴⁾。パリ第9区のエリアは、文化、芸術の中心地となった。とりわけ、後世において「芸術のシャンゼリゼ大通り」と称されることになるトゥール・デ・ダム通りや、同通り沿いのいくつもの伝説的な邸宅が「モンマルトルの丘の麓にあるヌーヴェル・アテーヌ（Nouvelle Athènes）¹⁵⁾」として1820年代に発展し、1824年にサン＝ジョルジュ地区として整備されたエリアは、ロマン主義の聖地になった。ヴィクトル・ユゴー（Victor Hugo, 1802-1885）がヌーヴェル・アテーヌについて「神は古代人のためにローマを、新しい人のためにパリをつくった」と述べたように¹⁶⁾、芸術的かつ知的なあらゆる革命のつぼみの都市としてのパリすなわち「芸術の都パリ」を、パリ第9区は確かに支えてきたのである。

1860年のパリ市の行政区の併合（annexion）¹⁷⁾によって公式に誕生したパリ第9区はまた、美術市場、金融、不動産取引、商業、娯楽の中心地でもあった。ラフィット通りの画廊やオークションハウスの「ホテル・ドゥルオー（Hôtel Drouot）」は業者や収集家たちを引き寄せたが、これらのエリアも1860年の併合でパリ第9区となり、さらに1867年に完成した建築家テオドール・バリュー（Théodore Ballu, 1817-1885）による豪華なサント・トリニテ教会が同区を飾った。パリ第9区の4つの地区すなわち、サン＝ジョルジュ地区、ショセ＝ダンタン地区、フォーブール・モンマルトル地区、ロシュシュアール地区の合流地点には、2代目のノートルダム・ド・ロレット教会が1836年から既に鎮座しており¹⁸⁾、パリ第9区の核となる象徴的存在だった。

20世紀への移行期における百貨店の誕生は世界の商業界を大成功に導いたが、パリ第9区に現存し、いづれも歴史記念物（monument historique）に指定されている1865年創業の「プラントン（Printemps）」と1893年創業の「ギャラリー・ラファイエット（Galeries Lafayette）」は、世界最初の百貨店と言われるパリ第7区の1852年創業の「ボン・マルシェ（Au Bon Marché. 現在はLe Bon Marchéに改名）」と共に百貨店ブーム

を牽引した。19世紀末はまた、パリ第9区と第18区の両区にかかるピガール（Pigalle）地区が行政の制限に対する反逆区であり、芸術家たちを非常に重んじるたまり場として栄えた。画家トゥールーズ＝ロートレック（Henri de Toulouse-Lautrec, 1864-1901）の作品の背景には、有名なキャバレーで熱狂するボヘミアンやほろ酔いの陽気なブルジョワが描かれているし、詩人ボードレール（Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867）はピガール広場の常連だった。パリ第18区で今も営業を続ける1889年創業の「ムーラン・ルージュ（Moulin Rouge）」¹⁹や、同区の伝説的な文芸キャバレー「シャ・ノワール（Chat noir）」、パリ第9区にかつて存在したキャバレー「バル・タバラン（Bal Tabarin）」は繁盛を極め、後にシャンソンの曲名にもなった『ピガールとブランシュの間』（ピガール広場とブランシュ広場の間、の意味）とロシュシュアール大通りには、トランプ占い師、レスラー、口ひげをたくわえた重量挙げ選手たちの小屋が広がっていた。また、いずれもパリ第9区に現存する「カジノ・ド・パリ（Casino de Paris）」、「フォリー・ベルジェール（Folies-Bergère）」、「オランピア（Olympia）」などの劇場には当時と同様、今も数多くの観客が訪れる²⁰。このように、百貨店での買い物、飲食を伴う夜遊び、観劇といった当時の商業や娯楽の新システムは、1世紀を経た現代生活にすっかり根付いたのである。

Ⅲ. パリ第9区の4つの地区の歴史的背景と特色

1. パリ第9区の現状と課題

21世紀の今日、豪華絢爛さや莫大な財産などはパリ第9区からパリ市の西部に移り、シャンゼリゼ大通り（パリ第8区）がグラン・ブールヴァールの伝統を引き継いだ。しかしパリ第9区は今も文化、芸術の中心地であり、特にサン＝ジョルジュ地区全体とロシュシュアール地区の北部が近年、再びブルジョワ化している。他方、ショセ＝ダンタン地区とフォーブール・モンマルトル地区は、職人たち、小商いたち、中間層のパリ市民たちによって占められており²¹、パリ第9区の中では長い間地味なエリアのロシュシュアール地区の南部を含めて、パリ第9区全体の再生が模索されている。そこで、パリ第9区の4つの地区すなわち、サン＝ジョルジュ地区、ショセ＝ダンタン地区、フォーブール・モンマルトル地区、ロシュシュアール地区について、歴史的背景と特色、さらに現在の位置づけを概観したい。

2. サン＝ジョルジュ地区－「芸術の都パリ」の核心、大規模不動産取引

（1）チボリ公園の誕生、ヌーヴェル・アテーヌの成功、高級住宅地分譲

サン＝ジョルジュ地区は、パリ第9区を4分割した北西部分に位置し、行政的にはアムステルダム通り（西端）、サン＝ラザール通り（南端）、マルティル通り（東端）、クリシー大通り（北端）によって囲まれる、面積においてパリ第9区内で最大の地区である。これらの通りはモンマルトルの丘への急な坂道につながることから、サン＝ジョルジュ地区は「モンマルトルの丘の麓」としばしば呼ばれている²²。ヌーヴェル・アテーヌやトゥール・デ・ダム通りなど、ロマン主義に関する伝説的な場所が点在するサン＝ジョルジュ地区は、「芸術の都パリ」を支えるパリ第9区の核心を成しており、文化、芸術の中心エリアとしての位置づけは今も不動である。つまり、「芸術の都パリ」というブランドを創出し、その価値を維持し続けているエリアと言える。

12世紀に建立されたモンマルトル大修道院の領地は、モンマルトルの丘の頂上から南に向かって広がり、将来のサン＝ジョルジュ地区のおよそ4分の3を覆っていた。17世紀末までこの地区は本質的に田舎だったが、ブランシュ通りやクリシー通りのように古くからある道、あるいはポーシュロン村と大修道院を結ぶピガール通りくらいしか、溝をまだつけられていなかったこの地区に、17世紀初め、新たな通りが横方向につくられ、広々とした庭園のある邸宅の建設が可能になった。また、パリの町とモンマルトルの丘の間の人々の往来に着眼した居酒屋や宿屋の主人たちも定住するようになり、入市関税事務所が隣接するブランシュ門付近の有名なキャバレー「グランデ・ピンテ（Grande Pinte）」は繁盛し、マルティル通りを上る耳障りな交

通音が、切れ目のないアルコール飲料の売り上げによって緩和されるほどだったと伝えられる²³⁾。田舎から町中に入る通り沿いに、居酒屋やキャバレーなどの歓楽街があり宿屋が建ち並ぶという光景は、現代人にも見慣れたものだろう。

フランス革命直前に建設された「徴税請負人の壁（mur des Fermiers généraux）²⁴⁾」はパリ市の北部に入市関税を集めることになり、パリ郊外の居酒屋という新たな市門が、パリの中心に人口を引き寄せる魅力の要因になった。人々はより安い値段でワインを飲み、居酒屋で楽しむようになった。同時期にパリ市はサン＝ジョルジュ地区のほぼ全体を含む、モンマルトルのコミュン（commune. 市町村）の一部を吸収し、猛烈な人口増加の下でパリ第9区のエリアの都市化が始まった。

他方、1720年にルイ15世によって創設された新たな地区、ショセ＝ダンタン地区の成功は、同地区の北に位置するサン＝ジョルジュ地区に波及していった。1730年代になると陸軍元帥リシュリュー公（maréchal-duc de Richelieu, 1696-1788）がクリシー通りに「フォリー（folie. 豪華な別荘。“狂乱”も意味する）」を建設させ、徴税請負人たちがすぐに模倣したが、これらのフォリーのうち徴税請負人ガイヤール・ド・ラ・ブエキシエール（Jean Gaillard de la Bouëxière de Gagny, 1676-1759）のものが、ブランシュ通りとクリシー通りの間のエリアの北部を占めていた。この大きな空間は17世紀末に、遊園地の先駆けである「チボリ公園（Tivolis）」に生まれ変わることになる。チボリ公園は一般市民に開放され、奇抜さや想像力を競った²⁵⁾。サン＝ジョルジュ地区の南西角、将来のサン＝ラザール駅に隣接するエリアにあった資本家ブタン（Simon-Gabriel Boutin, 1720-1794）のフォリーが最初のチボリ公園（大チボリ公園、1795年～1810年営業）となり、より北側に位置する2つのフォリー、すなわちリシュリュー公のフォリーが2番目のチボリ公園（第2チボリ公園、1810年～1826年営業）、ブエキシエールのフォリーが3番目のチボリ公園（新チボリ公園、1826年～1842年営業）として、それぞれ後に続いた。

1823年10月18日の「ジュルナル・デ・デバ（Le Journal des débats）」紙で歴史学者デュロー・ドゥ・ラ・マレ（Adolphe Dureau de la Malle, 1777-1857）は、「パリの新地区への手紙」欄にサン＝ジョルジュ地区の特にヌーヴェル・アテーヌのエリアの誕生を祝う記事を寄稿した。「この新地区は、呼吸する空気が健康に良く、カナール・ド・ルルク運河が新鮮な水を運んで来て、幸運にも南向きで（北側はモンマルトルの丘であることが保証される）、適度に高台であることによって美しい眺めを享受し、それがヴァレリアンの丘と樹木の生い茂ったムードンの小さな丘まで続き、商業や娯楽の中心地の近くという地理的位置にもかかわらず混乱や迷惑を感じないし、人里離れたかつ活気のある隠れ家を提供するように思われるので、すぐに詩人、芸術家、学者、旅行者、軍人、政治家たちを引きつけた。彼らは瞑想のための隠れ場、あるいは野望や栄光の幻惑からの逃げ場を探していた。」という称賛の記事を書いた彼自身も、サン＝ジョルジュ地区のロシュフコー通り11番地の住人だった。そもそもヌーヴェル・アテーヌは、マルティル通り（東端）、サン＝ラザール通り（南端）、ブランシュ通り（西端）の間に位置し、トゥール・デ・ダム通りという重厚な中心地をもち²⁶⁾、サン＝ジョルジュ地区全体の3分の2を占める東側エリアに相当する。パリ第9区のサン＝ラザール通り、ブランシュ通り、ピガール通り（現ジャン＝バティスト・ピガール通り）、クリシー通りは、「小さな家（petite maison）」つまり銀行家や貴族たちがパトロンとして保護する女優や歌手たちのために建設させた豪華な邸宅が増加しているエリアだった。人々は大規模な不動産取引を開始し、これらのうちヌーヴェル・アテーヌが、現存の最も有名なエリアとなった²⁷⁾。端的に言えば、高級住宅地開発の始まりである。

ヌーヴェル・アテーヌののどかな光景を背後に、パリでは商業や不動産投機が顕在化した。この動きは1820年代初めのトゥール・デ・ダム通りの分譲に加えて、それぞれが新地区、新教会であるサン＝ジョルジュ地区の分譲と2代目のノートルダム・ド・ロレット教会の建立に由来していた²⁸⁾。まず、トゥール・デ・ダム通りの高級住宅地分譲計画では有力者たちが競って邸宅を建設し、この動きはサン＝ジョルジュ地区の他のエリアにも急速に広がった。次に、1824年にサン＝ジョルジュ広場が中心となる高級住宅地分譲と、ノートルダム・ド・ロレット通り、サン＝ジョルジュ通り、ラ・ブリュイエール通りの開通が許可された。ナヴァラン通り、クロゼル通り、ブレダ通り（現アンリ＝モニエ通り）が生まれると同時に、かつてのチボリ公園

上に位置する、アムステルダム通り（西端）、サン＝ラザール通り（南端）、クリシー通り（東端）によって囲まれる三角地帯（サン＝ジョルジュ地区全体の5分の1ほどの西側エリア）が分譲された。パルム通り、リエージュ通り、ミラン通り、アテーヌ通りが生まれ、サント・トリニテ教会とヨーロッパ広場を結ぶロンドル通りがパリ北西部への道を開いた。さらに、1840年代になると、サン＝ジョルジュ地区の北西端、クリシー大通りの角の下のエリアに、カレ通り、ブリュクセル通り、ヴァンティミル広場、ドゥエ通りが生まれ、同地区はほぼ現在の外形になった。建築家バリュエによる荘厳なサント・トリニテ教会のおかげで、サン＝ジョルジュ地区は1867年に超高級住宅地のエリアを割り当てられることになり、バリュエ通りやシャプタール通りといった静かな通りには、靈感を求めて才能ある数多くの芸術家たちが住んだ。特に「スクエアドルレアン（square d'Orléans）」のような、特権者たちに割り当てられた一部の民間の高級集合住宅地は真に静かな隠れ家として、作曲家ダニエル＝フランソワ＝エスプリ・オベールらが暮らした²⁹⁾。スクエアドルレアンとは、1829年にヌーヴェル・アテーヌのエリア内に位置する現在のタイブー通り（当時はまだ開通していなかった）80番地に建設された、中庭を囲んで4つの高級アパルトマンが集まる閑静な一角で、歴史記念物にも指定されている。

サン＝ジョルジュ地区が高級住宅地分譲計画で大成功した背景には、パリ市の人口の猛烈な増加によって引き起こされた、住まいへの要求があった。新興階級のブルジョワは最新の快適さを渴望し、非衛生的な、古くからの地区を捨てたのである³⁰⁾。

（2）第二帝政からベル・エポックまでの住人たちとロマン主義

フランス第二帝政（1852年～1870年）からベル・エポック（1880年頃～1914年）までの間、パリ第9区の平穏な大通りには、パリが誇る文学、音楽、絵画のすべてがあった³¹⁾。ここで改めてフランス第二帝政とは、ナポレオン1世（Napoléon Bonaparte, 在位1804-1815）の甥であるナポレオン3世（Napoléon III, 在位1852-1870）の治世で、1853年に始まるパリ大改造や、1854年のデクレ（décret. 政令）によってエトワール広場から放射状に12本の大通りが通されるなど、「オスマン時代（temps d'Haussmann. 当時のセーヌ県知事のオスマン男爵（Georges-Eugène Haussmann, 1809-1891）の名に由来する）」とも呼ばれる近代都市計画の萌芽期である³²⁾。またベル・エポック（belle époque）とは、「美しき良き時代」を意味し、19世紀末から20世紀初頭における（正確な始期および終期については諸説あるが、始期については1880年、終期については第1次世界大戦が勃発する1914年までとするのが一般的である）、文化、芸術の繁栄期、特にパリの全盛期を指すが³³⁾、パリ第9区、その中でもサン＝ジョルジュ地区こそが核心だったと位置づけられる。つまり、新興階級のブルジョワたちだけでなく、ロマン主義世代すなわち古き良きパリの礼賛者たちもまた、新しいパリの作り手だった³⁴⁾。

1860年のパリ市の行政区の併合以来、もはやパリの町外れではなくなったパリ第9区のピガール広場とその有名なキャバレー「ラ・モール（Rat Mort）」や「テレム大修道院（l'Abbaye de Thélème）」は、「カフェ・ド・ラ・ヌーヴェル・アテーヌ（Café de la Nouvelle-Athènes）」をたまり場とする芸術家たちを引き寄せた。1885年にパリ第9区の現ヴィクトル・マセ通りに移転したキャバレー「シャ・ノワール」の電撃的な成功はパリの名士たちを引き寄せ、画家テオフィル・スタンラン（Théophile Alexandre Steinlen, 1859-1923）によって描かれた黒猫（シャ・ノワール）のポスターは世界中で作られた。同じ通りではキャバレー「バル・タバラン」が20世紀初頭に大成功を収め、クリシー通りの「カジノ・ド・パリ」では「黒いヴィーナス」の異名をとったジョセフィン・ベーカー（Joséphine Baker, 1906-1975）が美しい時代を生み出した。また、ブランシュ通りの「パリ劇場（théâtre de Paris）」、サン＝ジョルジュ通りの「サン＝ジョルジュ劇場（théâtre Saint-Georges）」、クリシー通りの「制作座（théâtre de l'Œuvre）」³⁵⁾はすべて現存し、当時の活気をなお維持している³⁶⁾。

サン＝ジョルジュ地区にはロマン主義に関する伝説的な場所が多く現存するが、トゥール・デ・ダム通り（“芸術のシャンゼリゼ大通り”）、スクエアドルレアン（4つの高級アパルトマンに囲まれた閑静な一角）、

ヌーヴェル・アテーヌ(サン＝ジョルジュ地区全体の3分の2相当の東側エリア)、という大きく3つの分類に沿って整理できる。1820年代からの高級住宅地分譲後のサン＝ジョルジュ地区の主な住人たちは、次の通りである。

①トゥール・デ・ダム通りの住人たち

- 帝国元帥ゲーヴィオン＝サン＝シール(Gouvion-Saint-Cyr, 1764-1830) …トゥール・デ・ダム通り1番地(1820年～1824年)。
- 女優マドモアゼル・マース(Mademoiselle Mars, 1779-1847) …トゥール・デ・ダム通り1番地(1824年～1838年)。
- 大公ワグラム(prince de Wagram, 1810-1887) …トゥール・デ・ダム通り1番地(1840年～1887年)。帝国元帥バルティエ(Louis-Alexandre Berthier, 1753-1815)の息子。
- 女優マドモアゼル・デュシェノワ(Mademoiselle Duchesnois, 1777-1835) …トゥール・デ・ダム通り3番地(1804年～1834年)。財政難で1834年に邸宅を売却し、ヌーヴェル・アテーヌのロシュフコー通り7番地に転居し、そこで1835年に死去した。
- 女優アリス・オジー(Alice Ozy, 1820-1893) …トゥール・デ・ダム通り3番地(1834年～1844年)。
- ワグラム大公妃ゼナイド(princesse Zénaïde de Wagram, 1812-1884) …トゥール・デ・ダム通り3番地(1844年～1854年)。トゥール・デ・ダム通り1番地の隣。1854年からは、大公ジョアシャン・ミュラ(prince Joachim Murat)と結婚した、娘のマルシー(Malcy)が住んだ。
- 悲劇俳優フランソワ＝ジョゼフ・タルマ(François-Joseph Talma, 1763-1826) …トゥール・デ・ダム通り9番地(1820年～1826年)。1787年にコメディ・フランセーズでデビューし、ナポレオン1世の巋肩の俳優になった。この邸宅で1826年に死去した。
- 画家オラス・ヴェルネ(Horace Vernet, 1789-1863) …マルティル通り11番地のアトリエを1821年に離れたが、隣人の画家テオドール・ジェリコー(Theodore Géricault, 1791-1824)のためにそこを所有し、自身はトゥール・デ・ダム通り5番地の邸宅を購入した。1835年には隣のトゥール・デ・ダム通り7番地の邸宅を、画家ポール・ドラローシュ(Paul Delaroche, 1797-1856)の妻だった、娘のルイズ(Louise)のために購入した。ドラローシュ一家はそこに、1861年まで住んだ。ヴェルネは「フランス歴史博物館(Musée de l'Histoire de France)」で働くためにベルサイユに住むことになり、1838年にトゥール・デ・ダム通り5番地の邸宅を売却した。この邸宅はアトリエとして、さまざまな芸術家たちに賃貸されることになった。
- 画家トマ・クチュール(Thomas Couture, 1815-1879) …トゥール・デ・ダム通り5番地のアトリエの最後の住人。この邸宅は1852年に、現存の建物に建て替えられた。

②スクエアドルレアンの住人たち

- 作曲家ダニエル＝フランソワ＝エスプリ・オベール(Daniel-François-Esprit Auber, 1782-1871) …サン＝ラザール通り36番地に、両親の古くからの土地を所有していた。
- 女優マドモアゼル・マース(前掲) …サン＝ラザール通り36番地の土地を、1824年に購入した。
- 建築家エドワード・クレッシー(Edward Cressy, 1792-1858) …サン＝ラザール通り36番地の土地を1829年に購入し、建築家ジョン・ナッシュ(John Nash, 1752-1835)がロンドンで実現したものに倣って、1830年代初めに、中央に中庭と噴水のある英国風の小公園を整備した。これが、スクエアドルレ안의始まりである。
- 劇作家アレクサンドル・デュマ(Alexandre Dumas, 1802-1870. “大デュマ”) …スクエアドルレ안의最も有名な住人の1人。1831年にスクエアドルレアンのアパルトマンに住み、パリの名所としてスクエアドルレアンを決定的に売り込んだ。

- 彫刻家ダントタン・ジャン (Dantan Jeune, 1800-1869) …1835年にスクエアドルレアン7番地に住み、現在のタイブー通りにあった大きな建物に沿って広大なギャラリーを設置したが、タイブー通りの開通によって立退きを迫られた。1859年にスクエアドルレアンを離れた後は、ヌーヴェル・アテーヌ内のブランシュ通り41番地の邸宅に住んだ。
- 作家ジョルジュ・サンド (George Sand, 1804-1876) …1842年からスクエアドルレアン5番地に住んだ、スクエアドルレアンひいてはロマン主義の伝説的な存在。ショパンが住んだアパルトマンは、中庭の向かい。
- 作曲家フレデリック・ショパン (Frédéric Chopin, 1810-1849) …スクエアドルレアン9番地に住んだ(1842年～1849年)、スクエアドルレアンひいてはロマン主義の伝説的な存在。サンドが住んだアパルトマンは、中庭の向かい。なお、ショパンが1831年10月5日にパリに着いて最初に住んだのもパリ第9区で、ポワッソニエール大通り27番地の5階に居を定めた³⁷⁾。
- 作家オノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) …サンドとショパンの親友。
- 詩人ハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797-1856) …サンドとショパンの親友。
- 画家ウジェーヌ・ドラクロワ (Eugène Delacroix, 1798-1863) …スクエアドルレアンに住んで欲しいという親友のサンドのほぼ願望どおりに、スクエアドルレアンから200メートルしか離れていないノートルダム・ド・ロレット通り54番地(現58番地)に1844年から住むために、パリ左岸を離れた。

③ヌーヴェル・アテーヌの住人たち

- 建築家オーギュスト・コンスタンティン (Auguste Constantin, 1791-1842) …サン＝ラザール通り52番地。
- 歴史学者デュロー・ドゥ・ラ・マレ (前掲) …ロシュフコー通り11番地。
- 画家ポール・ガヴァルニ (Paul Gavarni, 1804-1866) …サン＝ラザール通り、サン＝ジョルジュ通り、ブランシュ通りなど、自宅から観察できる通りの場面から作品の着想を得た。
- 画家アリ・シェフェール (Ary Scheffer, 1795-1858) …1811年にパリに来て、1818年からは有名な肖像画家として頭角を現し、1822年にオルレアン公 (duc d'Orléans) の子供たちのデッサンの教師になった。1830年にオルレアン公がルイ・フィリップ (Louis-Philippe, 在位1830-1848) として王位に就くと、シェフェールは重要なすべての特権を得た。同年にシェフェールはシャプタール通りの新居に移り住み、そこで音楽家、画家、作家、政治家、またフランツ・リスト (Franz Liszt, 1811-1886)、ショパン、サンドをもてなした。王家との親密さはシェフェールを宮廷と芸術界の間の自然な仲介者にし、シェフェール邸はロマン主義社交界の中心とされ、後に現在の「パリ市立ロマン主義博物館 (Musée de la Vie Romantique)」となった。
- 画家テオドール・シャセリオー (Théodore Chassériau, 1819-1856) …1838年にトゥール・オーベルニュ通り21番地の2のアトリエに住み、そこで描いた2つの作品「入浴するスザンナ」と「海のヴィーナス」で成功した。1841年にローマから戻ると、ヌーヴ＝サン＝ジョルジュ通り(現サン＝ジョルジュ通り)11番地にアトリエを見つけて、その後はブレダ通り(現アンリ＝モニエ通り)34番地に転居した。シャセリオーはそこで隣人の画家アンリ・ラマンらに再会し、1842年に同じ通りの4番地、1844年には同じ通りの8番地に住んだ。1846年からアルジェリアに滞在後、1848年にフロショ通り15番地の新居に移り住み、女優アリス・オジーとの静かな隠れ家となったこの邸宅で1856年に死去した。
- 画家アンリ・ラマン (Henri Lehmann, 1814-1882) …1836年からトゥール・オーベルニュ通り6番地に住んだ。
- 作曲家ダニエル＝フランソワ＝エスプリ・オベール (前掲) …サン＝ジョルジュ地区出身。1820年代初めから、サン＝ラザール通り50番地の2にある彫刻家ジャン＝バティスト・ピガール (Jean-Baptiste Pigalle, 1714-1785。「ピガール」という地名は彼の名前に由来する) の古い邸宅の付属家屋に住んだ。オベールは1828年にそこで、オリビエ通り(現シャトーダン通り)に住む隣人の劇作家ウジェーヌ・ス

クリーブ (Eugène Scribe, 1791-1861) と共に『ポルティチの啞娘 (La Muette de Portici)』を作曲し、1830年には19世紀の間に恐らく最も上演されたオペラコミック (喜歌劇) である『フラ・ディアヴォロ (Fra Diavolo)』を作曲した。その後1835年に、サン=ジョルジュ通り22番地の邸宅に転居した。

- 女優マリー・ドルヴァル (Marie Dorval, 1798-1849) …サンドとショパンの親友。サン=ラザール通り44番地に住んでいた1833年当時、アレクサンドル・デュマやヴィクトル・ユーゴーの劇作品の役で既に大成功していた。1836年にブランシュ通り40番地に転居した。
- 室内装飾家フランソワ=エドゥアール・ピコ (François-Édouard Picot, 1786-1868) …ロシュフコー通り34番地にアトリエを構え、ノートルダム・ド・ロレット教会の室内装飾を手掛けた。近所に住むギュスターヴ・モローが、1844年にピコのアトリエに弟子入りした。
- 建築家ルイ・モロー (Louis Moreau, 1790-1862) …ギュスターヴ・モローの父親。1852年7月に、1829年に建てられたロシュフコー通りの家屋を取得した³⁸⁾。
- 画家ギュスターヴ・モロー (Gustave Moreau, 1826-1898) …ロシュフコー通り14番地出身。自身は象徴主義の画家だったモローは、美術学校の教授としてアカデミーの中核にしながら、後のフォーヴィスム (Fauvisme. 野獣派) の画家たちをアトリエから多く輩出した³⁹⁾。モローの指揮で改築された邸宅は、素晴らしい邸宅美術館⁴⁰⁾として、現在の「ギュスターヴ・モロー美術館 (Musée National Gustave Moreau)」となった。
- 画家トゥールーズ=ロートレック (Henri de Toulouse-Lautrec, 1864-1901) …1897年5月にフロショ通り5番地にアトリエを移し、翌年にはフロショ通り15番地に転居し、ここが最後のアトリエとなった⁴¹⁾。

3. ショセ=ダンタン地区—フランスの商業と金融の中心地、パリ第9区の中心点ノートルダム・ド・ロレット教会

(1) ポーシュロン村から大貴族の邸宅地区へ

ショセ=ダンタン地区は、パリ第9区を4分割した南西部分に位置し、サン=ラザール通り (北端)、ラフィット通り (東端)、イタリアン大通りとカブシーヌ大通り (南端)、ヴィニヨン通りとアーヴル通り (西端) によって囲まれる、面積においてパリ第9区内で2番目の地区である。隣のフォーブール・モンマルトル地区と同様、ショセ=ダンタン地区は中世に干拓された古くからの沼地に位置し、徐々に野菜栽培が行われるようになった。12世紀から慈善病院「オテル=デュー (Hôtel-Dieu. 神の館)」の修道士たちが、現在のブランタン百貨店の場所あたりで農場を経営し、16世紀に「三位一体修道会 (Trinitaires)」と「マチュラン (聖三位一体会)」がそこを取得し、領地を少しずつ広げていった。他方、現サン=ラザール通りの下のエリアの北部に位置した「ポーシュロン」の修道士たちの農場は、周囲に小集落が形成されて「ポーシュロン村」と名付けられた。1310年にポーシュロン村民たちは権力を築くために、5周に防御された城壁を建設し、1380年にその領地はル・コック家 (Le Coq) の手に渡った。1461年にルイ11世 (Louis XI, 在位1461-1483) が一夜を過ごしたこともあったコック城 (château du Coq) はフランス革命による破壊を免れたが、19世紀にオスマン知事によって城跡の取壊し工事が行われた⁴²⁾。

1680年からはルイ14世の命令によってカブシーヌ大通りとイタリアン大通りが、ルイ13世 (Louis XIII, 在位1610-1643) の城壁の代わりに建設され、大通り沿いに壮麗な邸宅が建ち始めた。1713年にはアンティーン公バルダヤン・ドゥ・ゴンドラン (Pardaillan de Gondrin, duc d'Antin, 生年については1663-1665の諸説あり-1736) が、イタリアン大通りにガイヨン門 (porte Gaillon) と同じ高さの、パリで最も美しい邸宅の1つを手に入れた。アンティーン公はポーシュロン村民たちを再結集させるために車道を整備させ、人々はそれを「ショセ=ダンタン (chaussée d'Antin. アンティーン公の車道)」と呼び、1816年にショセ=ダンタン通りとなった。また、1720年には住宅地の差し迫った不足を背景に、パリ市の助役がルイ15世から新たな地区を城壁の外側につくる許可を得て、ショセ=ダンタン地区の分譲が始まった。新たな権力者である徴税請負人や銀行家たちは、自身や自分の愛人が使うための豪華な邸宅をブロンニヤール (Alexandre-Théodore

Brongniart, 1739-1813) やルドゥー (Claude Nicolas Ledoux, 1736-1806) といった流行の建築家に建てさせて、タイプ通り、サン＝ジョルジュ通り、ブドロワ通り、プロヴァンス通り、ヴィクトワール通りなどの新たな通りがつけられた。ショセ＝ダンタン地区は大貴族たちを引き寄せ、貴族のお気に入りのエリアだったフォーブル・サン＝ジェルマン地区やサントノレ地区と競うまでになった。1771年にグランデグー (大下水道) が覆い隠されて悪臭が改善されたショセ＝ダンタン地区には、モンテソン邸 (Hôtel de Montesson)、マダム・デルビユー邸 (Hôtel de Madame Dervieux)、ギマール邸 (Hôtel de la Guimard)、マダム・テルソンの大邸宅 (Palais de Madame de Thélusson)、現存するマリンドウラエ邸 (Hôtel Marin-Delahaye) など数多くの邸宅が建ち並んだ。1798年には将来のナポレオン1世がシャントレーヌ邸 (Hôtel Chantereine) を取得したことにより、ショセ＝ダンタン地区は数多くの帝国高官たちを引き寄せた。ショセ＝ダンタン地区の分譲は1775年頃にはほぼ終わり、古くからある最後の野菜畑は消滅した⁴³⁾。

(2) 19世紀後半のショセ＝ダンタンと首都のイメージパリ・オペラ座、高級ホテル、銀行本店、百貨店

現代都市とりわけ各国の首都には、歌劇場 (オペラハウス)、高級ホテル、銀行本店、百貨店などが必ずあるものだが、パリ第9区のショセ＝ダンタン地区こそが、こうした首都のイメージを世界で最初に具現化したエリアと言える。そこで、18世紀末の分譲後に都市化が急速に進むことになる、ショセ＝ダンタン地区の19世紀初頭からの動きを見ていきたい。

グラン・ブールヴァールは当時のショセ＝ダンタン地区の成功を反映する大通りとなり、イタリアン大通りには最も有名な施設が集められた。19世紀に入ると、これらの大通り沿いには、豪華な装飾の「カフェ・アルディ (Café Hardy)」、最高級のたまり場の「アイスクリーム店トルトーニ (Glacier Tortoni)」、デユマやバルザックが最良にしていた「カフェ・フォイ (Café Foy)」や「カフェ・ド・パリ (Café de Paris)」などが開業し、現代に通じる会食趣味やカフェ文化が本格的に普及していく。また、ショセ＝ダンタン地区の「ボードビル劇場 (Théâtre du Vaudeville)」や「ヌーボーテ劇場 (Théâtre des Nouveautés)」は、いわゆる「大通り劇場 ("de boulevard")」として安定した成功を収め、このうち1927年にパラマウント映画になったボードビル劇場は、7つのスクリーンをもつ映画館「パラマウント・オペラ (Paramount Opéra)」として現在も営業を続けている⁴⁴⁾。

ショセ＝ダンタン地区はフランス第二帝政期において、首都パリのブランドイメージを強化する役割を担っており、その最高峰が建築家シャルル・ガルニエによる新しいパリ・オペラ座すなわちパレ・ガルニエだった。地区の北西角に1836年に建築家ルイ＝イポリット・ルバ (Louis-Hippolyte Lebas, 1782-1867) による2代目のノートルダム・ド・ロレット教会が、北東角付近に名門校リセ・コンドルセ (Lycée Condorcet) がそれぞれ位置するショセ＝ダンタン地区のブランドイメージはもともと高かったが、この地区の建築様式に対応した構造の新たな大通りの図面を引かなければならなかったオスマン知事が、自身の県知事命令 (ordonnancement) によってボージョン大通りを延伸し、それが1864年にオスマン大通りと名付けられ (大通りの設計図上に位置する自身の生家を犠牲にしたため)、1865年にショセ＝ダンタン通りにつながったことにより、ショセ＝ダンタン地区はパリの都心へと変貌した。古くからある都市構造の撤去、つまり「オスマン大幹線 (Grands axes haussmanniens)」と呼ばれるパリの幹線道路整備事業によって、ショセ＝ダンタン地区は一変したのである⁴⁵⁾。パリ・オペラ座に隣接するスクリーブ通り (東端)、オベール通り (西端)、カブシーヌ大通り (南端) によって囲まれる三角地帯で、1862年に開業した「グランド・ホテル (Grand Hôtel. 現在の名称はインターコンチネンタル・パリ・ル・グラン・ホテル)」とホテル内の「カフェ・ド・ラ・ペ (Café de la Paix)」は、今も世界で最も有名な高級ホテルと老舗カフェであるし、スクリーブ通りとカブシーヌ大通りの角で1867年に開業した衣料品店「オールドイングランド (Old England)」は2012年まで同地で営業を続け、開業当時のパリにおける英国ブームを現代に伝えた⁴⁶⁾。

フランス第二帝政の終焉後からアール・ヌーヴォー (art nouveau. 新しい芸術) 前まで、すなわち1870年から1895年までの25年間は、パリの大きな建物に目立った変化が見られなかったため、近代建築史上は「断

絶 (rupture) の時代」として切り捨てられることもあるが、都市計画との関係では、近代交通機関が目覚しく発達した時期という点で重要な意義をもつ⁴⁷⁾。こうした変化を背景に金融と商業の波がやって来た19世紀末のショセ＝ダントン地区には、現代の首都のイメージにも直結する、2つの新たなものが登場した。1つは、大通り沿いに出現した銀行本店である。オスマン大通り29番地には「ソシエテ・ジェネラル (Société Générale)」本店、カプシーヌ大通り6番地には「クレディ・リヨネ (Crédit Lyonnais)」本店、イタリアン大通り16番地には将来の「BNPパリバ (BNP Paribas)」本店がそれぞれ建ち、特にソシエテ・ジェネラル本店には、壮麗なホールと18トンの鋼鉄の扉の金庫室がある非常に大きな建物を見ようとする顧客ややじ馬が押し寄せた。保険会社が後に続き、ショセ＝ダントン地区は高級住宅地から商業地区へと変わっていった。19世紀後半からの一連のパリ万博 (1855年の第1回パリ万博、1867年の第2回パリ万博、1878年の第3回パリ万博、1889年の第4回パリ万博、1900年の第5回パリ万博「アール・ヌーヴォー博」)⁴⁸⁾ は外国人観光客のパリへの殺到を促し、彼らは必ずパリ・オペラ座とグラン・ブールヴァールを観光して回った。そしてもう1つが、商業革命と言われる百貨店の登場である。いずれもオスマン大通りに位置する1865年創業の「ランタン」と1893年創業の「ギャラリー・ラファイエット」のセットを、人々は非常に早くから「百貨店 (les Grand Magasins)」と名付けたが、これらの百貨店とパリ・オペラ座とグラン・ブールヴァールが、今日まで続くショセ＝ダントン地区の魅力の3つの拠点となっている⁴⁹⁾。

4. フォーブール・モンマルトル地区—美術市場の中心地、老舗の商店街

(1) グランジ・バテリエール村から大邸宅街へ

フォーブール・モンマルトル地区は、パリ第9区を4分割した南東部分に位置し、ラフィット通り (西端)、モンロン通り (北端)、フォーブール・ポワソニエール通り (東端)、グラン・ブールヴァール (南端) によって囲まれる、面積においてパリ第9区内で最小の地区である。フォーブール・モンマルトル地区の起源は、パリ第9区の他の地区と同様、「モンマルトルの丘の麓」と呼ばれる広大な沼地で、干拓のための長い期間を経てフィリップ2世の治世下に、サン・トポルテューヌのカトリック司教座聖堂参事会員たちが領地内のいくつかの建物と周辺の畑を譲渡した場所に生まれた、グランジ・バテリエール村である。数世紀にわたってこの領地は手から手へ渡り、16世紀に分割された後は主な建物が18世紀に豪華な邸宅に変わり、跡地にはさらに1852年開業のオークションハウス「オテル・ドゥルオー (Hôtel Drouot)」が建つことになる。17世紀末までグランジ・バテリエール村の領地は野菜栽培業者たちが専有したままだったが、ルイ14世が「黄色い堀」の跡に大通りを建設すると決めたことで、窒息状態だったパリ市は北方向に拡大することが可能となり、野菜畑は市域化していった。徴税請負人や銀行家たちが、修道士たちの広大な土地を低価格で買い取り、個人の邸宅を建設させた後、収益を生む大きな建物としてその場所を譲渡した。貴族階級が不動産投機に熱狂した18世紀、大貴族たちはフォーブール・モンマルトル地区に田舎の魅力を感じて投機するようになった。ルイ16世の治世ではラフィット通り、ロッシーニ通り、シャシャ通り、ベルティエ通りが通され、新たな地区がつくられることは保証された。グランデグー (大下水道) の跡には、リシェ通りとプロヴァンス通りができた。ショセ＝ダントン通りと同様、ラフィット通り、シャシャ通り、ドゥルオー通りは成功し、やり手の銀行家たちがそこにいくつもの邸宅を建設した。例えば、モンマルトル大通り16番地の邸宅は、最初の住人がオーストリア大使のメルシー＝アルジャントー伯爵フロリモン＝クロード (Florimond Claude, comte de Mercy-Argenteau, 1727-1794) で、シャルル10世 (Charles X, 在位1824-1830) の治世下に建物がさらに高くなり、「パッサージュ・ジュ・ジュフロワ (Passage Jouffroy)」の入口の上に張り出すかたちの、現存の「ホテル・ロンスレイ (Hôtel Ronceray)」になった。他にも、「フランス大オリエント (Grand Orient de France: GODF)」が1852年に取得したカデ通りの建物は、最初は1725年にリシュリユー公のために建設された「小さな家」だったし、ドゥルオー通りの「徴税請負人オニーの館」は、1750年頃に女優のために徴税請負人が建てさせた邸宅を、1829年にアグアド伯爵 (Alexandre Aguado, 1784-1842) が買い取って内部を豪華に改装し、1849年にパリ第2区役所になった後、1860年の行政区の併合によってパリ第9区役所になった。また、

トレビス通り36番地の「ボニー館 (Hôtel Bony)」は、フランス王政復古期の瀟洒な傑作として高く評価される歴史記念物である⁵⁰⁾。

(2) 商業戦略上の休憩場所と老舗の商業・娯楽施設ーパッサージュ、カフェ、画廊、劇場

不動産取引が拡大した19世紀に、大通りはカフェやパッサージュ (passage. ショッピングアーケード) のような商業戦略上の休憩場所によって区切られるようになり、それらは1830年代になると日常に欠かせない優雅でぜいたくなたまり場になる一方、1825年からはベルジェール集合住宅地区 (cité Bergère)、ルージュモン集合住宅地区 (cité Rougemont)、トレビス集合住宅地区 (cité de Trévis) といった富裕層向けの集合住宅地区が現れた⁵¹⁾。

フォーブール・モンマルトル地区には今も、パリ屈指の老舗の商業施設や娯楽施設が少なくない。またフランス第二帝政期からは、パリ第2区の北部と新聞の専売権を分け合ったことから、フォーブール・モンマルトル地区はジャーナリズムの中心地でもあった。19世紀からベル・エポックまでの間はラフィット通りが美術市場を引き寄せて、最盛期の1913年には20の画廊が存在した。その後、オークションハウス、ドゥルオー通り、「パッサージュ・ジュフロワ」や「パッサージュ・ヴェルドー (Passage Verdeau)」も、切手収集家や古書愛好家などさまざまな収集家たちを引き寄せ、こうした美術市場は、カデ通りの市場や古い商店街との共生的側面を維持している。1869年にリシェ通りに創業した「フォーリー・ベルジェール」や1882年に「パッサージュ・ジュフロワ」内に創業した「グレヴァン蠟人形館 (Musée Grévin)」などは、現在も外国人観光客で賑わっている⁵²⁾。

19世紀からのフォーブール・モンマルトル地区における有名な商業・娯楽施設などは、次の通りである。

①パッサージュ

両パッサージュは共にフォーブール・モンマルトル通りに沿っており、パリの中心とモンマルトルの丘の間をつなぐ役目がある。

- 「パッサージュ・ジュフロワ」…モンマルトル大通り10番地とグランジ・バテリエール通り9番地を結ぶかたちで、1840年代半ば（正確な年については諸説あり）に開通した。1882年創業の「グレヴァン蠟人形館」がある。
- 「パッサージュ・ヴェルドー」…グランジ・バテリエール通り3番地とフォーブール・モンマルトル通りを結ぶかたちで、1840年代半ば（正確な年については諸説あり）に開通した。古書店、古美術店が並ぶ。

②飲食店

- 「カフェ・ル・ブレバン (Café Le Brébant)」…フランス第一帝政期にボワツソニエール大通りで開業した「カフェ・グランズオム (Café des Grands Hommes)」が1863年に「ル・ブレバン」となり、エミール・ゾラ (Émile Zola, 1840-1902) やギュスターヴ・フロバール (Gustave Flaubert, 1821-1880) が出席する文学夕食会を開催した。現在も、同地で営業を続ける。
- 「カフェ・リシェ (Café Riche)」…18世紀末にイタリアン大通りとベルティエ通りの角で開業し、1865年に当世風に改装し、作家アルフォンス・ドーデ (Alphonse Daudet, 1840-1897) やワインコンクールによってしばしば有名な、地下のワイン貯蔵庫がある美食店だった。
- 「カフェ・ド・マドリッド (Café de Madrid)」…モンマルトル大通り6番地。
- 「ブイヨン・シャルティエ (Bouillon Chartier)」…1896年にフォーブール・モンマルトル通り7番地で開業した、大衆食堂 (ブイヨン) レストラン。歴史記念物に指定された建物で、現在も営業を続ける。

③物販店

- 「バザール・ヨーロッパ（Bazar Européen）」…モンマルトル大通り10番地の、パリ土産の有名店。
- 「ア・ラ・メール・ドゥ・ファミーユ（À la Mère de Famille）」…1761年にフォーブール・モンマルトル通り35番地で開業した、パリ最古の菓子店。昔ながらの棒マシュマロを購入できるパリで唯一の店としても知られ⁵³⁾、現在も同地で営業を続ける。

④画廊

- 「ベルネーム＝ジューヌ画廊（Galerie Bernheim-Jeune）」…1863年にラフィット通りで開業し、コロー（Camille Corot, 1796-1875）やクールベ（Gustave Courbet, 1819-1877）の作品を展示した。
- 「アンブローズ・ヴォラル画廊」…美術商アンブローズ・ヴォラル（Ambroise Vollard, 1866-1939）が、1893年にラフィット通りで開業した。
- 「ポール・デュラン＝リュエル画廊」…美術商ポール・デュラン＝リュエル（Paul Durand-Ruel, 1831-1922）がラフィット通りに画廊を移転し、1876年の第2回印象派展では会場として自身の画廊を提供し、ピサロ（Camille Pissarro, 1830-1903）、モネ（Claude Monet, 1840-1926）、ルノワール（Pierre-Auguste Renoir, 1841-1919）、ドガ（Edgar Degas, 1834-1917）といった印象派の画家たちの作品を展示した。

⑤新聞社

- 『ル・プティ・ジュールナル（Le Petit Journal）』…ラ・ファイエット通り。1863年創刊、1944年廃刊の日刊新聞。
- 『ル・マタン（Le Matin）』…ポワッソニエール大通りとフォーブール・ポワッソニエール通りの角。1884年創刊、1944年廃刊の日刊新聞。
- 『ル・フィガロ（Le Figaro）』…ドゥルオー通りの「オテル・ドゥルオー」内。フランス国内の新聞としては最古の1826年創刊で、現行紙。現在の本社所在地は、パリ第9区のオスマン大通り14番地。ジョルジュ・サンド、オノレ・ド・バルザック、テオフィル・ゴーティエ（Théophile Gautier, 1811-1872）、ジェラルド・ド・ネルヴァル（Gérard de Nerval, 1808-1855）、ジュール・ヴァレ（Jules Vallès, 1832-1885）、エミール・ゾラなど、有名な文筆家たちを抱えていた。
- 『レキップ（L'Équipe）』…フォーブール・モンマルトル通りに長い間、本社を仮設していた、日刊スポーツ新聞の現行紙。

⑥劇場

- 「フォーリー・ベルジェール」…1869年にリシェ通りで創業した劇場。イヴェット・ギルバール（Yvette Guilbert, 1865-1944）、ラ・ベル・オテロ（la Belle Otéro, 1868-1965）、ジョセフィン・ベーカー、ミスタンゲット（Mistinguett, 1873-1956）など、数多くのスターが舞台に立った。1990年代にフォーブール・モンマルトル地区が外国人観光客に人気となったため、パリ第9区は「フォーリー・ベルジェール」を取壊してから方針転換して、保護リストに登録した。現在も、同地で営業を続ける。

⑦その他

- 「シャトーダンの水治療法浴場（Hydrothérapie Bains de Châteaudun）」…フォーブール・モンマルトル通り66番地。陶磁器製の店頭装飾のみが、同地に現存する⁵⁴⁾。

5. ロシュシュアール地区ーパリ第9区で唯一の下町エリア

(1) 果樹園から労働者たちの下町エリアへ

ロシュシュアール地区は、パリ第9区を4分割した北東部分に位置し、フォーブール・ポワッソニエール

通り（東端）、マルティル通り（西端）、ロシュシュアール大通り（北端）、ラマルティンヌ通りとモントルン通り（南端）によって囲まれる、面積においてパリ第9区内で3番目の地区である。モンマルトルの丘につながる坂道の上に位置するロシュシュアール地区は古くからの曲がりくねった道が多く、数世紀にわたって果樹園や菜園しか無く、17世紀になるまで都市化の兆候は見られなかった。同地区を北上するロシュシュアール通りはパリの中心からモンマルトル方向に導く古い道の一部であるし、フォーブール・ポワッソニエール通りはその名の通り（poissonnière. 魚屋）、フランス北部の港でとれた魚を首都パリに運んだ古い道で、パリ第18区のポワッソニエール通り、パリ第2区のポワッソニエール通りはその延長だが、一方でベルフォン通りのような新たな通りもいくつか現れた。1645年にはラマルティンヌ通りに初代のノートルダム・ド・ロレット教会が建立されたが、1791年までカトリック小教区教会に昇格されなかった。「居酒屋の主人たちのノートルダム」という同教会のあだ名は、当時のロシュシュアール通りやマルティル通りで既に多くのワイン販売業者たちが開業していたことを示している。18世紀末までロシュシュアール地区は、少ない通りに縁どられた広大な囲い地としか認識されていなかったが、1770年代になるとラ・トゥール・ドーヴェルニュ通り、ラマルティンヌ通り、ロシュシュアール通り、マルティル通りなどが舗装されていった。この時期、パリ市の中心部では住宅地が不足し、ルイ15世によって新たな地区が創設され、特にパリ第9区のショセ＝ダントタン地区は急激に発展したが、同じ区内にありながらパリの中心から遠いロシュシュアール地区に不動産投機の熱狂が及ぶのはかなり遅く、宗教的な不動産侵奪が、収益を生む大きな建物や個人の邸宅にその場所を譲ったのは、フランス革命直後のことだった⁵⁵⁾。1790年のデクレ（政令）がモンマルトルのコミューンの南部をパリ市に併合したことに伴い、ロシュシュアール地区の広大な土地もパリ市に併合された⁵⁶⁾。

それ以来、ロシュシュアール地区には労働者、新興階級のブルジョワ、小商いたちが定住すると共に、静かで平穏な居住環境を求めるいくつかの裕福な一族が混じるようになったが⁵⁷⁾、パリ第9区では唯一の地味な下町エリアという位置づけは現在も変わらない。

（2）パリの庶民生活—町工場、労働者用団地、居酒屋、サーカス小屋

パリ第9区の中では異色と言えるロシュシュアール地区は、19世紀を通じて工場エリアとして発展し、特に1824年にペトレル通りとコンドルセ通りの間にガス製造工場が設置されたことによって、工場エリアとしての適性を示すことになった。このガス会社が1864年にコンドルセ通り6番地に建設した威厳のある建物は、2008年まで「フランスガス公社（Gaz de France: GDF）」本社として使われ、現在は「フランスガス供給ネットワーク（Gaz Réseau Distribution France: GRDF）」本社として使われている。他にも、現在のリセ・ジャック・ドゥクール校（Lycée Jacques-Decour）の場所に1808年に建設されて1867年まで稼働した屠殺場や、1834年にロシュシュアール通りに建設されたピアノ製作会社「プレイエル（Pleyel）」の工場兼ショールーム、有名な「軍用短靴（godillot）」を考案したアレクサンドル・ゴディロー（Alexandre Godillot, 1816-1893）の工場など⁵⁸⁾、ロシュシュアール地区の町工場で作られるものはどれもパリ市民の生活に直結するものだった。

1851年にナポレオン3世は、ロシュシュアール通りに労働者用団地の「シテ・ナポレオン（Cité Napoléon. ナポレオン団地）」を設立し、手頃な家賃で、常駐の医者もいるこの集合住宅に、500人の労働者たちを受け入れた。本質的に工場エリアであるロシュシュアール地区には居酒屋が多く、18世紀末の調査ではロシュシュアール通りに18人、マルティル通りに25人の居酒屋の主人たちが住んでいたという。また、1784年に建設された「徴税請負人の壁」はパリ第9区を包含し、入市関税事務所が隣接するパリ市の北部の大通り上の3つの門、すなわちマルティル門、ロシュシュアール門、ポワッソニエール門付近のパリ郊外の居酒屋が繁盛した。ロシュシュアール地区がパリ第9区内では異色の下町として発展することになった要因として、1860年代に造園技師アルファン（Jean-Charles Adolphe Alphand, 1817-1891）⁵⁹⁾がロシュシュアール地区で唯一の緑地空間となるモントルン広場を設計したにもかかわらず、フランス第二帝政が同地区に似たような大きな建物をいくつも詰め込み、しかもオスマン知事がモーボウジュ通りしか新たな通りの図面を引かなかったという、都市計画上の失敗も指摘されている⁶⁰⁾。このように労働者たちの下町のイメージが強

いロシュシュアール地区だが、1873年に「シルク・フェルナンド（Cirque Fernando. フェルナンド・サーカス）」としてロシュシュアール大通り63番地のテントで開業したサーカス小屋はやがて、2000以上の場所で興行するフランスのサーカスの殿堂「シルク・メドラノ（Cirque Médrano. メドラノ・サーカス）」となり、1969年に廃業するまで1世紀にわたって、ロシュシュアール地区の宝石であり続けた⁶¹⁾。

Ⅳ. 都市化の到達点と都市の展望

19世紀後半に近代都市化をいち早く実現したパリは、世界に輝くショーウィンドーであり、多くの輝きを後世に伝えた。とりわけ、金融、不動産取引、商業、娯楽といった近代都市にとって不可欠な領域と、文化、芸術というフランスのアイデンティティーを支える領域のいずれにおいても中心地として繁栄を極めたパリ第9区は、都市化の1つの到達点を早期に示したエリアと言えるだろう。その背景には常に、19世紀のパリにおける猛烈な人口増加、つまり「都市化（urbanisation）」というフランス語が本質的に意味する「人口の都市集中」という課題があった。パリ第9区の急速な都市化が、新たな地区と通りの創設によるところが大きいことは既に概観してきたが、歩道を備えた「通り」が初めて現れることで（例えば、フォーブール＝モンマルトル地区のペルティエ通りが、歩道付きの最初の通りの1つである⁶²⁾）、大勢の人々が大通りをそぞろ歩くという光景が生まれたのも、19世紀後半のパリにおいてだった。現代人が今も求め続ける都市の賑わい創出、あるいは都会の喧騒そのものが、こうした都市のイメージを無意識に継承しているとも考えられる。現代に生きる我々は、消費活動、交通利便性、ビジネスチャンスなどから醸し出される魅力を都市の本質と信じているが、こうした都市のイメージが形成されたのは19世紀後半からの約150年間の経緯に過ぎない。

19世紀から続いてきた都市化の時代を経て今、都市に関する従来の価値観自体が終焉した。2020年に生きる我々は、新たな段階を迎える転換期に立っている。将来の世代に継承すべき、持続可能性と強靱な回復力を兼ね備えた豊かな都市とはいかにあるべきか、まさに問われている。

*本稿は、筆者が「令和元年度大阪市立大学在外研究員（A項）」として、2020年1月にフランス共和国で行った研究成果の一部である。



写真：パリ・オペラ座（パレ・ガルニエ） 筆者撮影

【注】

- 1) 経済学者モハメド・エラリアン (Mohamed A. El-Erian, 1958-) が2008年9月のリーマン・ショック後の世界経済について2009年に提唱した、グローバル金融危機を含む世界経済の構造転換の下、景気回復を果たしたとしても以前のような状態には戻らないとする概念である「ニューノーマル (New Normal)」を、2020年のコロナ・ショック後の世界経済について、従来の費用対効果と効率性の追求からリスク回避とレジリエンス (resilience, 強靱性、回復力) の管理に転換する、という内容に進化させた概念をいう。朝日新聞GLOBE+HP <https://globe.asahi.com/article/13395103> (最終閲覧日2020年12月5日)
- 2) Philippe Roy, « Mémoire des rues Paris 9e Arrondissement 1900-1940 », Parigramme (2018) p.12.
- 3) パリ市HP
<https://www.paris.fr/pages/comprendre-le-projet-de-modernisation-du-statut-de-la-ville-de-paris-3224/> (最終閲覧日2020年12月5日)
- 4) Thierry Cazaux, 'La Nouvelle Athènes', « La Maison musée de Gustave Moreau », Somogy éditions d'art (2014) p.13.
- 5) 徴税請負人 (Fermier général) 制度は、ルイ14世の財務総監コルベール (Jean-Baptiste Colbert, 1619-1683) が推進する財務政策の一環として、1681年に誕生した。60人の徴税請負人からなる徴税組合が予め定められた金額を国家に前払いし、国家に代わって間接税の徴収を行うという同制度は、徴税の民営化と言える。徴税人の中には、巨万の富を蓄財する者も現れた。鹿島茂『失われたパリの復元 バルザックの時代の街を歩く』(新潮社、2017年) 16～17頁。
- 6) 1746年に徴税請負人アレクサンドル・オニー (Alexandre d'Augny, 1715-1798) が、「コメディ・フランセーズ (Comédie-Française)」の鼻根の女優のために建設させた邸宅である。
- 7) Roy, supra n.2 p.17.
- 8) 「urbanisation」というフランス語には、都市化、都市開発のほか、人口の都市集中、都市の過密化現象などの和訳が当てられている。
- 9) Roy, supra n.2 p.9.
- 10) Id. pp.9-10.
- 11) Id. p.9.
- 12) Id. p.10.
- 13) Id.
- 14) 1875年に完成した現在のパリ・オペラ座 (Palais Garnier, パレ・ガルニエ) も、パリ第9区に位置する。なお、シャルル・ガルニエ (Charles Garnier, 1825-1898) がパレ・ガルニエを仕上げる際に、オスマン知事はこの傑作を活用することを目的として、複数の大通りを整備した。Roy, supra n.2 p.11.
- 15) ヌーヴェル・アテーヌという名称自体は、14世紀初頭から使われていた。古代ギリシア・ローマに由来する名称だが、18世紀末までは当世風の名称を再び付けられていた。1821年からは、ヌーヴェル・アテーヌという名称が維持されている。Cazaux, supra n.4 p.13.
- 16) Roy, supra n.2 pp.10-11; Cazaux, supra n.4 pp.13-14.
- 17) 1860年にパリの市域が拡大された際の行政区分の変更については、既存の12区にそのまま8区が加わったのではなく、12区を完全に解体して区割りを一からやり直しているため、パリの区制を論じる場合には、1859年までの1区～12区と1860年以後の1区～12区は全く別であることを理解する必要がある、と指摘される。鹿島・前掲(注5) 50頁。
- 18) Roy, supra n.2 p.11.
- 19) 1889年10月5日にモンマルトルの丘の麓、クリシー大通り90番地に開業した「ムーラン・ルージュ」は、自身も常連だった画家ロートレックによるポスター作品で広く知られているが、当時の来客数が祭日には1万人に達することもあった繁盛店だった。高橋明也=ダニエル・ドゥヴァンク監修『三菱一号館美術館コレクション〈II〉トゥールーズ・ロートレック展』(三菱一号館美術館、2011年) 37頁、74頁。
- 20) Roy, supra n.2 pp.11-12.
- 21) Id. p.12.

- 22) Id. p.16.
- 23) Id.
- 24) 壁の全長は24キロメートル、高さは3.3メートルで、環状にパリを囲んでいた。鹿島・前掲（注5）17頁。
- 25) Roy, supra n.2 p.16.
- 26) Cazaux, supra n.4 p.13.
- 27) Roy, supra n.2 p.17.
- 28) Cazaux, supra n.4 p.14.
- 29) Roy, supra n.2 p.17.
- 30) Cazaux, supra n.4 p.14.
- 31) Roy, supra n.2 p.18.
- 32) 久末弥生『都市計画法の探検』（法律文化社、2016年）、第4章資料「ベル・エポックと近代都市計画－日本への潮流」80頁。
- 33) 同上・83頁。
- 34) Cazaux, supra n.4 p.14.
- 35) 1893年に、俳優で演出家のリュネ＝ポー（Lugné-Poe, 1869-1940）によって設立された。高橋＝ドゥヴァンク・前掲（注19）73頁。
- 36) Roy, supra n.2 p.18.
- 37) 国立フリデリク・ショパン研究所附属フリデリク・ショパン博物館（NIFC）ほか企画構成『ショパン－200年の肖像』（求龍堂、2019年）25頁。
- 38) Cazaux, supra n.4 p.14, pp.16-22.
- 39) 三菱一号館美術館／岐阜県美術館『1894 Visions ルドン、ロートレック展』（筑摩書房、2020年）46頁。
- 40) モローと同じく画家の邸宅美術館としては、1857年12月28日からドラクロワが生涯最後のアトリエを構えた、パリ第6区の「ドラクロワ美術館（Musée National Eugène Delacroix）」がある。Arlette Sérullaz, « La Musée Eugène Delacroix », Musée du Louvre Éditions (2005) p.4. また、銀行家と画家の夫妻の邸宅だった「ジャックマール＝アンドレ美術館（Musée Jacquemart-André）」、大ブルジョワかつ貴族（伯爵）の邸宅だった「ニッシム・ド・カモンド美術館（Musée Nissim de Camondo）」など、19世紀末のブルジョワの邸宅美術館はパリ第8区に点在する。
- 41) 高橋＝ドゥヴァンク・前掲（注19）146頁。
- 42) Roy, supra n.2 p.58.
- 43) Id. pp.58-59.
- 44) Id. p.59.
- 45) 久末・前掲（注32）80頁。
- 46) Roy, supra n.2 pp.59-60.
- 47) 久末・前掲（注32）83頁。
- 48) 第4回パリ万博（1889年）と第5回パリ万博（1900年）が近代都市計画に与えた影響については、久末・前掲（注32）84頁参照。
- 49) Roy, supra n.2 p.60.
- 50) Id. pp.98-99.
- 51) Id. p.99.
- 52) Id. pp.99-100.
- 53) Id. p.116.
- 54) Id. pp.99-100.
- 55) Id. p.152.
- 56) Id. p.153.

57) Id. p.152.

58) Id. p.153.

59) 理工科学学校卒のエリート官僚だったアルファンは、森の整備と都市公園の設立を最優先に考えるナポレオン3世によるパリ大改造において、オスマン知事の部下としてプロムナード・植樹局 (Service des Promenades et Plantation) の局長に任命され、実務面を託されていた。久末弥生『フランス公園法の系譜』(大阪公立大学共同出版会、2013年) 17頁。

60) Roy, supra n.2 p.153.

61) Id.

62) Id. p.99.

